松浦武四郎の四国遍路をたどる　あれから二百年　コロナ時代のへんろ考現学

武内文治　著

著者の武内文治さんは高知県四万十町に住んでおられます。ある時日本地名研究所に、四万十町の字名調査の件で問い合せがあったことが縁で、日本地名研究所の会員になってくれました。

『地名と風土』一三号に友人の楠瀬慶太さんと一緒に寄稿していますので、もう一度お読みください。

その武内さんから『松浦武四郎の四国遍路をたどる』が日本地名研究所に寄贈され、開いてみると「松浦武四郎」とあり、「あれ?北海道のことでない」と驚き、推選文を書かれた高知県立坂本龍馬記念館学芸員の高山嘉明さんのことばに納得しました。

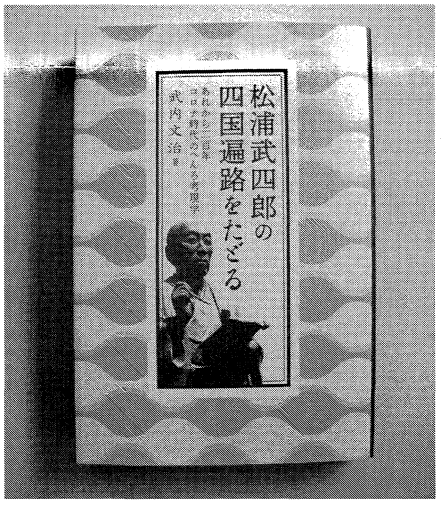
松浦武四郎という〝旅の巨人〟が十代の頃から七十一歳で生涯を閉じるまで、ひたすら歩き続けたその目的は様々であった。その初期に『四国遍路道中雑誌』として著した。矢立と野帳を携えて道中の事象を鋭く洞察する武四郎の旅のスタイルは、後に蝦夷地探査において真価を発揮することになるルポルタージュ作家としての原点といえるだろう。と述べています。

武内さんはそれに倣って旅を計画するが、まず武四郎の人となりを知ることであった。活動の記録、武四郎の軌跡、生き方などを調べている。武四郎を知らない読者にも参考になる。

三十九日間の四国遍路は、著者の活動日記と武四郎の軌跡をもとに、その場所・地域の寺社や往時の人物、事象を追跡し今日に伝え残る事柄を探し求めている。そこには明治以降の政策の転換などにより多くのものが変化あるいは消滅している事実であることを著者は訴えたいのであろう。

事実を事実として記録することはそんなに難しいことではない。そこに武四郎の目と武内文治の目を通して、消えてしまった地名や村の姿が私には強く印象付けられました。

武内文治さんと楠瀬慶太さんは、二〇一六年に四万十町の住民らで「奥四万十山の暮らし調査団」を結成し、HP『四万十町地名辞典』を完成し、高知県全体に広めたいと活動を続けています。この書籍を通して四国の新しい発見を見守りたいです。



編集後記

日本地名研究所通信一〇〇号に「川崎市文化賞」受賞のことをお知らせできることは大変うれしいことです。授賞式で福田紀彦市長が、第四〇回全国地名研究者大会に出席したことの感想を述べながら、地名の大切さを授賞式に参加された方々に訴えていました。地名研究活動を文化として位置づけ今後も精進していくことを確認した一日でした。日本地名研究所事務局に三〇数年務めていただいた増田治子さんが退任されました。日本地名研究所の歴史を知る大切な方でした。お世話になりました。（編集子）